

「お前はここを継ぐけ、ええ加減オカワリさまのお世話の仕方を教えとかんとね」

祖母が真理を案内したのは、昼なお薄暗く陰湿な日本家屋の奥。

両親が離婚の話し合いをしている間、小学生の真理は父方の祖母の屋敷に預けられていた。

祖母は厳格な人物で、子供心に近寄りがたさを感じていたが、それ以上に真理はこの屋敷の雰囲気苦手だった。

「おばあちゃん、私おうちへ帰るよ」

「先のことはどうなるかわかりやせん。友泰もなんじやい、よりにもよつて性悪を選んで。私にや最初からわかつとつたよ、お前の母親は育ちがよくないつて。だから浮気なんぞするんじや」

「オカワリ様つて？」

母への中傷を質問で遮れば、白目が濁つた三白眼がぎよろりと動く。

「オカワリ様はな、うちの守り神じやよ」

飴色の光沢帯びた床板を軽く軋ませながら、祖母は突拍子もない話を語り始める。

「大同家は三百年続く旧家で昔はここら一帯を治める庄屋じやつた。オカワリ様は大同家が座敷牢で飼つとる神様じや」

「飼つてるの？ 祭つてるんじやないの？」

真理は無邪気に聞き返す。

神様といえ、神社やお寺に祭られている有り難い存在だ。「飼つている」という表現は不敬ではないか。

祖母が仏頂面で咳く。

「今にわかる」

納戸の奥には木製の格子で区切られた、座敷と板の間を折半した空間があつた。

「座敷牢じやよ」

「なにそれ」

「一族から出た狂人や、世間様に顔向けできない恥さらしを閉じ込めておく場所じや。早い話身内用の牢屋じやの。明治までなら少しデカイ屋敷にやどこでもあつた」

そこで言葉を切り、因業な目付きで真理の横顔を一瞥。「時代が時代ならお前の母親も入つとつたでな」

「つ……」

大粒の涙をためて項垂れた時、格子の向こうに転がる空の茶碗が目に入る。

せいぜい二畳程度しかない空間に茶碗だけが転がる光景は、なんとも侘しく場違いだ。

「あれ……」

怪訝そうに指さす真理を無視、格子の隙間に手を入れて茶碗を取り出す祖母。

「これにご飯を盛つてき」

「えっ」

有無を言わせぬ劍幕に押されて茶碗を受け取ってしまったつから、おずおずと確認をとる。

「台所の？ 炊飯器の中に入つてるご飯でいいの？」

「お前は馬鹿か」

祖母が毒々しい口ぶりで罵り、矢継ぎ早に指図する。

「台所の神棚に上げてある冷や飯じや、それを茶碗に移して持つてこい」

「このお茶碗汚いよ、端っこ欠けてるし。洗つてから移すの？ 最初からわけてあるんならそつちと交換すれば済む話じや」

納得いかない真理がさらに続けようとすると、頬に鋭い痛みが炸裂する。祖母に平手打ちをお見舞いされたのだ。

「はよ行かんか愚図！」

理不尽な叱責。真理は涙が零れないように、茶碗を胸に抱いてその場を走り去る。

祖母が「あの女に似て頭が悪い」と誘う声が背中に被さる。泣きたいのを堪えて台所へ行き、神棚の下に踏み台を移動させ、茶碗から茶碗へご飯を移し替える。

「よいしよ」

大急ぎで駆け戻ると、祖母は座敷牢の正面に仁王立ちして

いた。

等間隔に嵌まる木格子に背中を付け、三白眼を劍呑に光らす姿は、まるで何かを見張っているようだ。

「持つてきたよおばあちゃん」

祖母は礼も言わず欠けた茶碗を受け取るや、それを格子の隙間に突っこんで床に直接おく。

「これでしまいじや。あとは週に一度見にくればええ」

「見に来てどうするの」

「同じ事のくり返しじや。からつぽになつてたら取り替える。台所に冷や飯が用意してあるから、必ずそつちをよそるんじや。よそつたらまた持つてきて中に入れる、延々同じ事のくり返しじや。ええか、必ず冷や飯じやぞ。神棚にあるのじやぞ」

「待つて、からつぽになつてたらつて……誰が食べるの？」

「オカワリ様じやよ」

真理は気味が悪くなる。木製の格子の向こうには二畳程度の板敷きの間があるだけで、他はからつぽだ。粗末な茶碗の他には家具や調度すら見当たらない。

「だれもないよ……」

「当たり前じや。俗な人間に易々と神が見えてたまるか」
意見を唱える真理に居丈高に切り返す。

祖母曰く、座敷牢にはオカワリ様がいる。真理の仕事はオカワリ様が空にした茶碗に冷や飯をよそる事。

「なんで冷たいご飯なの？ あたにかいほうがおいしいのに。それにお箸もないよ」

「勘違いさせんためじゃ」

祖母は意味深にほめかし、格子越しの虚空に目をこらす。

「守り神は祟り神にもなる。上手く手懐けられているうちはいいが、一度頭に乗らせてしまえば恐ろしい災いが待ち受ける。尽くして尽くして尽くし尽くす、冷や飯食いが分相応だと骨の髄までわからせとくんじゃ」

祖母と真理の会話の間、欠けた茶碗はポツンと板の間におかれていた。

祖母は所在なげに立ち尽くす真理をひと睨み、恐ろしい形相で念を押す。

「ええか。オカワリ様のおかわりにや絶対こたえちやならんぞ」

以降、オカワリ様のお世話が真理の日課になった。とはいえ仕事はそう多くない。

週に一度座敷牢を見に行き、茶碗が空になってたら冷や飯をよそるだけいい。

何故誰もいないのに茶碗が空になつてゐるかは謎だが、深く考えるのはやめにした。悩んでも解決しないし、考えるほど怖くなるだけだ。何かするたび祖母に叱られ、肩身が狭い思いをしてきた真理は、言われたままに体を動かす習慣が身に付いてしまつていた。

オカワリ様のお世話が日課になり、だんだん怖さが薄れていくと、子どもらしい好奇心ももたげてきた。

「オカワリ様はキレイに食べるね」

オカワリ様のお茶碗には米が一粒も付いてない。感心して独り言を呟けば、みし、と床が軋む。

「ひっ!？」

隙間にさしいれた手から茶碗を落つことす真理。

床の軋み音は格子越しの板の間から響いてきた。子供が足踏みしているような音。

「……今の、お返事？」

一瞬の恐怖が萎むと、かえつて親しみが沸き上がる。

「本当にいたんだ。おばあちゃんの言つてたこと嘘じゃなかった」

週に一度来る度お茶碗は空つぽになつていたが、猫がこっそり忍び込んで食べたのかもしれないと疑つていた真理は、格子を掴んで生き生き身を乗り出す。

「私へのお返事ならもっかい床を鳴らして」

真理が疑い深げにせがめば、みし、と床が軋む。

「やっぱり、言葉もわかるのね」

体の奥底から興奮が沸き上がる。

人ならざる存在と交信できた喜びと驚きが完全に恐怖を吹き飛ばし、一気にオカワリ様に親近感が湧く。

「オカワリ様、ご飯だよ」

みし。

「キレイに食べたね」

みし。

「なんで私がいる時は食べてくれないの。恥ずかしいの」
みし。

「はいなら一回、いいなら二回床を鳴らして。私が見てる前でご飯を食べるのはいや？」

みし。

「残念、オカワリ様が食べるどころ見たかったなあ。ねえねえ、オカワリ様ってどんな姿してるの？ おばあちゃん
は俗な人間には見えないって言ってたけど、ひよつとして
角が生えてたり目がたくさんあったりするの」

みし……みし。